

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18H00990

研究課題名(和文) 学校的社会化の理論的・経験的研究 - 「児童になる」論理と実践の教育社会学的探究

研究課題名(英文) Theoretical and empirical studies of school socialization

研究代表者

北澤 毅 (KITAZAWA, TAKESHI)

立教大学・名誉教授・名誉教授

研究者番号：10224958

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、「子どもが児童になる」過程を「学校的社会化」と独自に定義し、学校的社会化の歴史と現在をテーマに研究を展開した。第1に、これまでの研究課題を継続する目的で、幼稚園や小学校での観察調査と、学校的社会化からの逸脱としての「いじめ」と「発達障害」問題について観察やインタビューなどの質的調査を実施することで著書刊行など確かな成果を得た。第2に、特別な教育理念を持つ私立学校や離島の小規模学校などでの観察や教員へのインタビュー調査などを新たに実施しこれまでの研究成果を比較相対化することを通して、「学校的社会化」問題について新たな知見を得るとともに、新たな課題を発見することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

第1の学術的社会的意義は、北澤毅・間山広朗編『囚われのいじめ問題』を2021年に刊行したことである。本書では、2011年に発生した「大津市中学生自殺事件」の事例研究を通して「いじめ観」や「いじめ言説」を問い直すことで、「いじめ問題」の解決策を提案したことである。そして第2の意義は、本研究の最大の特徴である構築主義とエスノメソドロジーという方法的立場から、幼稚園や小学校の授業場面の分析を通して、「児童になる」ための相互行為能力を解明するとともに、そうした能力の欠如状態を「発達障害」と判断し特別な支援を実施しようとする公教育の問題性を指摘するとともに対応策を検討したことである。

研究成果の概要(英文)：We defined the process where children as small existence were transformed into "jido"(=pupil) as "school socialization", and developed our research on the theme of History and Present of school socialization.

First, for the purpose of continuing our previous research projects, we conducted some observations at some kindergartens and elementary schools and, in addition, used other qualitative methods such as discourse analysis and interviews on bullying and developmental disorder which are deviation from school socialization. These researches brought us some significant results such as publication of two books and many academic papers. Second, we conducted new observations and interviews of some private schools with unique educational philosophy and a small public school on a remote island. Comparing the outcome of these research projects with the achievement we have done in our previous researches, we obtained new findings and research questions of school socialization issues.

研究分野：教育社会学

キーワード：教育社会学 歴史社会学 構築主義 エスノメソドロジー 学校的社会化 いじめ 発達障害 子ども観

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

これまでの共同研究のなかで、子どもが小学校に入学し「児童」へと変容していく過程を「学校的社会化」と独自に定義し、その社会化過程のメカニズムについて、相互行為研究と歴史社会学研究という二つのアプローチからの解明を試み一定の成果をあげてきた。具体的には、「児童になる」過程の解明を目指して公立小学校の観察調査を継続するとともに、「いじめ」と「発達障害」を「児童になる」過程からの逸脱現象と位置づけ、それぞれについて事例研究を積み重ねてきた。また歴史社会学研究としては、「児童の誕生」過程の解明を目指して文献研究と史資料分析を継続してきた。これらの共同研究成果を通して浮上してきた新たな課題は、我々の学校的社会化研究から得られた分析知見は日本の公立小学校に特有のものなのか、それとも近代公教育制度に共通する一般的知見と言えるものなのかということである。こうした新たな課題に導かれて、設置主体や地域性(海外も含めて)を考慮しつつ多様な形態の学校(主たる対象は小学校だが幼保も含む)での調査可能性を検討し始めた。また、学校的社会化からの逸脱事例として位置づけてきた「いじめ」と「発達障害」については、研究の重点を「いじめ」から「発達障害」へと徐々に移動させていくことを検討した。その理由は、「いじめ」事例研究に関してはゴールが見えてきており、これまでの研究成果を踏まえた編著刊行が主たる目的となったのに対し、二つの事例研究に絞ってきた発達障害研究に関しては、調査対象の拡大を計画していたからである。具体的には、発達障害問題成立過程の構築主義的分析や、発達障害児を持つ保護者へのインタビュー調査を実施することで、発達障害カテゴリーの浸透過程、言い換えれば、学校的社会化原理が家庭をはじめとした現代社会にいかにか浸透し新たな教育問題を生み出しているかを明らかにすることを目指した。

2. 研究の目的

以上の背景を踏まえ、大別して、(1)学校的社会化基礎研究、(2)発達障害の視点からみる学校的社会化、(3)「尋常1年生の誕生」の歴史社会学、という3つの研究領域を設定した。

(1) 学校的社会化基礎研究

学校的社会化基礎研究では、理論研究と経験的研究を目指した。理論研究では、「社会化」「子ども」「発達障害」などをキーワードとする文献読解を積み重ねるなかで、学校的社会化理論の精緻化を目指すとともに経験的研究に有効な概念探索を行った。経験的研究では、データの継続的蓄積を目的とした公立小学校調査を実施していくと同時に、初期学校的社会化段階に位置づく幼稚園や保育所の日常的な教育・保育活動場面の調査を新たに実施することで学校的社会化研究を進めていった。それらに加えて、我々の学校的社会化研究から得られた分析知見が日本の公立小学校に特有のものなのか、それとも近代公教育制度に共通する一般的知見と言えるものなのかということを確認するために、多様な形態の学校観察調査を実施した。さらには、「いじめ」事例研究の集大成としての編著刊行が現実的な目標となったので、そのための補充調査を必要に応じて実施した。

(2) 発達障害の視点からみる学校的社会化

第1の課題は、これまで実施してきた発達障害児童生徒2名に対する事例研究を継続して実施していくことであった。一人は、2018年度に小学5年生になった児童であるが、小学校入学時より継続して参与観察やインタビューを実施してきた。対象児童は本研究が終了する2023年3月に中学校を卒業予定であったゆえ、卒業まで調査を継続することで、本人の自己意識や、本人に関わる学校関係者の評価内容の変容過程の解明を目指した。もう一人は、2018年度に中学3年生になった生徒であり、小学校4年次に特別支援学級から通常学級への転籍という特殊な経験をしていた。本人や保護者などへのインタビューはこれまでも実施してきたが、本研究期間中に高校進学や大学進学という重要なステージを経験することで、本人の自己意識や保護者の発達障害観がどのように変化するかを、インタビューを通して明らかにすることを目指した。

第2の課題は、発達障害児童生徒達は、学校とは異なる場でどのように振る舞っているのか、さらには、保護者達は発達障害をどう捉え、子ども達にどのような教育機会を与えようとしているかという問いを設定しインタビュー調査や言説分析などの質的調査を実施した。そして、ある一定の発達障害観が私たちの社会の中にどのように浸透しているかを解明し、そこで得られた知見を踏まえた上で、発達障害や特別支援教育に関する制度変革に向けた提言を試みた。

(3) 「尋常1年生の誕生」の歴史社会学

これまでに、卒業式の変遷を明らかにすることで、就学に関心のない人びとが多く存在した明治前半期から、次第に国民のほとんどが学校に取り込まれ、同級生、同窓生といった集団を形成していった経緯、さらには学校が「感情の共同体」として機能するようになる過程を解明してき

た。また、明治期末ごろに全国に普及した「個性調査簿」、すなわち教師が児童の身体・学力・行動・性格特性や児童の家族構成・家庭状況・近隣の状況までを調査して記録する表簿の分析を通して、教師が児童を理解し把握しようとする実践の成立と深化、「家庭の学校化」とも呼ぶべき「学校と家庭との連絡」の歴史的経緯を明らかにしてきた。これらは、「児童になる／児童にする」ことの歴史的展開の一部であり、本研究では、ここまでの知見を基盤として「尋1」の誕生と観念の普及、それに伴う実践の様相を読み解くことを目指した。

以上の3領域の調査を促進させ得られた分析知見を有機的に結びつけることで、社会化問題の論点の一つとなっている「変化」と「飛躍」概念の違いを明確にすることは、難しい課題ではあるが本研究の主たる目標の一つである。そのためにも、(1)～(3)までの研究を有機的に結びつけることで、社会化論に新たな知見を導入することを目指した。同時に、本研究全体として、「児童になる過程」の相互行為論的かつ歴史社会学的分析を通して「児童」概念の更新を目指すことも狙いの一つとして設定した。

3. 研究の方法

「学校的社会化」という概念を精緻化するための社会化論関連の理論研究と同時に、「児童になる」過程の経験的研究として、多様な質的調査法（参与観察、インタビュー調査、言説分析など）を駆使することで、幼保小の教育場面の映像データの相互行為分析、いじめ問題や発達障害問題の関係者へのインタビュー調査と分析、明治大正期を中心とした戦前期の史資料収集と歴史社会学的分析を予定した。(1)領域の理論研究としては、「学校的社会化」概念の一層の精緻化をはかるために、a)社会化論（「方法知」の習得と自己意識の獲得過程を中心に）とb)近代的孩子論の系譜、という二つの課題に取り組むために文献研究を進めるとともに、これらの領域を専門とする研究者との意見交換の場を設定することで問題関心の明確化を図った。

(1)領域の経験的研究の中心課題は、公立小学校での観察調査を継続的に実施することだが、それと同時に、「児童になる」過程が、小学校入学以前に一定程度達成されているという仮定のもと、幼稚園や保育所での観察調査の実施も検討した。さらには、海外を含む多様な形態の小学校での観察調査を実施することで、我々の研究知見が近代公教育に共通する一般的知見となる可能性を持つのかを検証した。

また先述したように、これまで継続してきたいじめ事例研究については編著刊行が最大の目的となってきたので、そのための補充調査を必要に応じて実施する予定とした。

(2)領域では、「児童らしさ」と表裏の関係にあるカテゴリーとして「発達障害」を位置づけ、「発達障害」カテゴリーが言説レベル、実践レベル、当事者レベルでどのように使用されているかを解明するために、複数の研究方法を検討した。一つは、これまで事例研究の対象としてきた児童生徒本人達へのインタビューとともに、本人にとっての重要な他者である保護者と教師へのインタビューを継続実施することである。なかでも、小学一年生から調査対象としてきた児童の観察調査は中学卒業まで継続したいと考え、卒業までの過程で、本人がいかなる自己意識を形成し進路選択をするかを見届けようとした。さらには、学校外での発達障害児童生徒の様子を理解するために、発達障害児童生徒を対象とした学習塾での観察と、その塾に子どもを通わせている保護者へのインタビュー調査を計画した。

(3)領域では、「現代の児童の振る舞い方のなかには、地域性や階層性を超越した歴史的な身体性が刻印されている」という仮説を設定し、それを立証するために、これまで収集してきた個性調査簿等の分析を予定した。さらには、「児童」概念の誕生と浸透過程を解明するために、明治期の教師向けの書籍・雑誌を中心に分析をはじめ、入学準備に関する内容を含む『セウガク一年生』（1925年発行・小学館）などの史資料にも分析対象を拡大することで、「教育する家族」を含む「児童にする」実践の浸透過程の解明を目指した。

4. 研究成果

各年度の研究成果を以下に示す。

(2018年度)

2018年度においては、研究実施計画に基づき、(1)学校的社会化基礎研究、(2)発達障害の視点からみる学校的社会化研究、(3)「尋常1年生の誕生」の歴史社会学研究を行った。(1)については、社会化論に関する理論・方法論的研究として、構築主義と学校的社会化という観点から、逸脱と社会化に関する理論的方法論的な検討を行った。経験的研究としては3種類の調査を実施した。第1に、関東地方の小学校・幼稚園を、年間を通じて継続的に観察した。第2に、中国地方の私立こども園でのフィールドワークを夏期に集中して実施したが、新たな成果は、幼稚園の教育場面でも学校的な相互行為形式が観察できたこと、さらには、「園児であろうとする」子ども達の実践方法を分析できたことである。そして第3に、アメリカの公立小学校を見学することで、海外の小学校での観察調査の可能性が生まれた。(2)については、関東地方の小学校において特別支援学級に在籍している児童の観察調査や、小学校時代に特別支援学級から普通級に転籍した経験をもつ中学3年生に関するインタビュー調査を実施した。また、発達障害児に関し

でこれまでに収集した資料データの整理を行った。こうした作業を通して、「逸脱」を構成する概念装置としての「発達障害児」に対する「子どもらしさ」の語られ方や、放課後児童クラブでの発達障害児支援における支援員の葛藤についての検討を行った。(3)では、近代学校制度開始以来、小学校への新規参加者が「児童になる」様相と、彼らを取りまく保護者や教員のもつ「児童観」の変容を歴史社会学の観点から明らかにした。また、これまでに収集した一次史料のデータベース化と分析を継続し、大正期になされた児童への評価から教師の児童観の検討を行った。

以上の調査研究の進展に伴って、2018年度には、学会発表や学術論文に加えて、学校における教師の方法論を社会的立場から描き出した編著(北澤・間山編)、および発達障害の社会学研究としての単著(鶴田)を公刊した。

(2019年度)

2019年度は、研究実施計画に基づき、(1)学校的社会化基礎研究、(2)発達障害の視点からみる学校的社会化研究、(3)「尋常1年生の誕生」の歴史社会学研究を行った。(1)では、学校場面での「児童になる」過程への考察を深めるために、学校建築の有り様と、その場で生起する相互行為の關係に着目した議論の可能性を探究した。相互行為研究としては、関東地方の小学校と幼稚園、中国地方のこども園でのフィールドワークを実施した。その成果として、小学校や幼稚園の教育場面における学校的な相互行為形式に着目して、「児童であること」や「園児であること」を実践する方法の一端を描き出した。また、昨年度に続きアメリカの公立小学校を訪問し、「学校的社会化」の比較調査の可能性を探った。(2)では、関東地方の公立小学校において実施した、特別支援学級に在籍している児童の観察調査から、教員がいかんして発達障害児の個別のニーズを認識し、教育的支援を実践しているのかを明らかにした。また、発達障害児の「問題」が立ち現れる状況を検討し、特別支援学級担任、交流学級の学年担任や支援員たちの連携のあり方を考察した。さらに、小学4年次に特別支援学級から普通級へ転籍し、2019年度に高校1年生となった生徒を対象に、「彼は発達障害者である」という周囲の人びとの認識が依然として維持されているのか、それとも揺らぎが生じてきたのかを考察した。(3)では、小学校において教師が集団を管理する方法として用いてきた罰、児童個人の成績および行動や性質を記録した表簿、児童虐待の問題化に注目し、「児童になること」「児童にすること」の歴史的経緯について分析を行った。

以上の調査研究の進展に伴い報告書を刊行した。また、学術誌や大学紀要を中心に、複数の成果を公表した。

(2020年度)

2020年度は、新型コロナの影響で、計画していたほとんどすべての研究調査活動が停止してしまった。(1)学校的社会化基礎研究領域では、予定していた幼稚園や小学校でのフィールド調査が不可能となったばかりか、海外の小学校観察調査も先送りとなった。さらには、大津いじめ自殺事件関係のインタビュー調査も実施の見通しが立たず断念した。(2)発達障害の視点からみる学校的社会化研究領域でも、小学一年生から観察調査を継続してきた児童が中学生になったことを受けて、在籍中学校に観察調査を依頼したが、新型コロナが落ち着くまでは難しいという回答だったので実施できなかった。(3)「尋常1年生の誕生」の歴史社会学研究領域も、小学校などでの史資料収集調査を断念せざるを得ず、国会図書館のデジタルコレクションなどでの資料収集のみを継続した。

このような状況の中で辛うじて実施できたのは、Zoom形式での研究会や読書会と、業者に委託して本科研共同研究のホームページを作成し運営を開始することであった。その結果、大幅な繰越金が発生したが、2021年度になって、公立小学校での観察調査や、編著刊行に向けた大津いじめ自殺事件関係の補充調査など、もっぱら(1)領域の調査については比較的順調に推移した。しかし、新型コロナの影響が長引くなか、(2)領域については、2021年度後半になってやっと中学校での観察およびインタビュー調査を実施できるようになるなど、予定通りに進まない部分が残った。それゆえ、またもや繰越金が発生したが、2022年度になって、少なくとも(1)領域で予定していた調査はほぼ実施することができ、(2)領域についても比較的順調に進んだが、(3)領域については予定通り進まなかった。

(2021年度)

2020年度は、新型コロナの影響で、予定していた研究調査活動がほとんど実施できなかったことを受けて、2021年度は、方針を変更する部分と継続する部分とを慎重に見極めつつ研究活動を実施した。その結果、2021年度中に、予定していた調査を一定程度実施できたが、新型コロナの影響が長引くなか予定通りに進まない部分も残り、繰越金が発生した。(1)学校的社会化基礎研究領域では、理論的かつ実証的知見を深めるために、複数の研究者に講演を依頼した。また、2021年度の繰り越し分で、2022年度に関東圏の公立小学校での継続的な観察調査を実施したが、海外の小学校調査に関しては、交渉を試みるも、新型コロナの影響が続くなか調査の見通しが立たない一年となったゆえ、同じく繰越金を使用して、2022年度に、奈良教育大学付属小での調査を実施するとともに、奈良教育大学で研究会を実施した。また、大津いじめ自殺事件に関しては、編著刊行に向けた補充的なインタビュー調査を継続することで(比較という視点から、川口市いじめ不登校事案のインタビュー調査や裁判資料などの収集をした)、予定通り9月に編

著を刊行することができた。(2)発達障害の視点からみる学校的社会化研究領域については、NPO 法人が経営する発達障害児童生徒のための学習塾での観察調査を予備的に実施するとともに、児童生徒の保護者へのインタビュー調査実施に向けた準備作業を進めた。さらには繰越分を使用して、2022 年度に、小学 1 年次から調査対象としてきた生徒の様子を在籍中学校で観察するとともに、生徒本人、および生徒の保護者と学級担任などにインタビュー調査を実施した。(3)「尋常 1 年生の誕生」の歴史社会学研究領域では、新型コロナの影響が続くことで、北海道の公立小学校での資料収集調査の見通しが立たず、引き続き、大学図書館やデジタルアーカイブスでの資料収集を実施した。

(2022 年度)

(1)学校的社会化基礎研究領域では、新型コロナの影響で発生した繰越金(2020 年度分と 2021 年度分)を使用して、公立小学校でのフィールド調査を継続実施した。さらには、私立のオルタナティブスクールや離島の公立小規模校など、「普通」とは異なる学校 4 校で授業見学と管理職等へのインタビューを実施することで新たな問題関心が生まれるなど進展があったが、本年度の予算での新たな学校調査は実施しなかった。(2)発達障害の視点からみる学校的社会化研究領域では確かな進展が 2 点あった。第 1 に、これまでの研究蓄積をもとに編著刊行の見通しが立ったことである(2024 年 3 月刊行予定)。そして第 2 に、2021 年度、NPO 法人が経営する発達障害児童生徒を対象とした学習塾の様子を見学するなどの予備的調査を実施したことを踏まえて、本学習塾に子どもを通わせている保護者へのインタビュー調査を実施した。これらの調査成果の一部は、上述した編著に組み込むとともに、新たな編著や単著の企画を構想しているところである。最後に(3)「尋常 1 年生の誕生」の歴史社会学研究領域であるが、様々な事情が重なることで、北海道の公立小学校での史資料収集は実施できなかったが、これまでに収集してきた資料をベースに、共同研究メンバー各自が学術論文や雑誌論文などの成果を公表した。

そして 2023 年 3 月、5 年間の本科研共同研究を総括するとともに、今後の研究の進展を見通すことをねらいとして、研究分担者や研究協力者など総勢 19 名の執筆者からなる報告書(243 頁)を刊行した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計52件（うち査読付論文 14件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 31件）

1. 著者名 粕谷圭佑・平井大輝	4. 巻 1
2. 論文標題 学校的相互行為の比較社会学序論 - へき地少人数校とオープンクラス実践校の参与観察から -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 連携教育開発センター紀要	6. 最初と最後の頁 29-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20636/00013600	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 平井大輝	4. 巻 20
2. 論文標題 学級で授業することの相互行為研究 : 授業の教授局面に着目して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 立教大学大学院教育学研究収録	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 今井聖	4. 巻 20
2. 論文標題 「学校的社会化」研究の射程 : 研究方針の明確化と再定式化の試み	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 立教大学大学院教育学研究収録	6. 最初と最後の頁 39-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平井大輝	4. 巻 111
2. 論文標題 「みんなで決める」ことの相互行為研究-学級での活動を成り立たせる教師の教育実践に着目して-	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教育社会学研究	6. 最初と最後の頁 25-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 粕谷圭佑	4. 巻 1
2. 論文標題 「静かにしてくださーい！」 - 授業場面の作られ方の社会学的考察 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 奈良教育大学出版会 E-book	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 保坂克洋	4. 巻 28
2. 論文標題 発達障害児と健常児をつなぐ実践 学童保育における指導員の相互行為に着目して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 子ども社会研究	6. 最初と最後の頁 141-161
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.57410/jschildstudy.28.0_141	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 間山広朗	4. 巻 51
2. 論文標題 法教育を活用したいじめ授業プログラムの試行	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 神奈川大学心理・教育研究論集	6. 最初と最後の頁 131-139
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岩佐菜々子	4. 巻 19
2. 論文標題 障害児保育をめぐる「保育学研究」の特徴と課題	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 立教大学大学院教育学研究集録	6. 最初と最後の頁 92-97
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井出大輝	4. 巻 19
2. 論文標題 明治期小学校における評価の歴史研究に関する検討：「試験から考査へ」の移行をめぐる解釈の整理を通して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 立教大学大学院教育学研究集録	6. 最初と最後の頁 34-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 今井聖	4. 巻 19
2. 論文標題 「子ども」の自殺はいかに語られていたのか(2)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 立教大学大学院教育学研究集録	6. 最初と最後の頁 60-75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 稲葉 浩一	4. 巻 12
2. 論文標題 達成のない課題としての「児童生徒理解」 教師たちの語りから	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 北海道教育大学大学院高度教職実践専攻研究紀要：教職大学院研究紀要	6. 最初と最後の頁 139-151
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32150/00009626	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小野奈生子・高嶋江	4. 巻 20
2. 論文標題 教師の<協働>の一形態としての問題経験の語り合い：「抱え込み」ということばに着目して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 共栄大学研究論集	6. 最初と最後の頁 145-155
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 有本真紀	4. 巻 1037
2. 論文標題 家庭と学校の関係小史 「学校的社会化」の視点から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『早稲田文学』増刊号「家族」	6. 最初と最後の頁 252-264
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 今井聖	4. 巻 108
2. 論文標題 子ども の自殺をめぐる補償・救済の論理 災害共済給付制度における運用上の変化に着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育社会学研究	6. 最初と最後の頁 141-161
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11151/eds.108.141	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鶴田真紀	4. 巻 108
2. 論文標題 「自閉症児の親」の構成 療育の准専門家になることをめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育社会学研究	6. 最初と最後の頁 227-247
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11151/eds.108.227	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 有本真紀	4. 巻 927
2. 論文標題 卒業式歌・卒業ソングの同時代史	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 歴史地理教育	6. 最初と最後の頁 120-125
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 権藤敦子・嶋田由美・有本真紀	4. 巻 2
2. 論文標題 《勅語奉答》と唱歌教育：雑誌記事を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 広島大学大学院人間社会科学研究科紀要 教育学研究	6. 最初と最後の頁 19-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15027/51600	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 水谷 智彦	4. 巻 88
2. 論文標題 停学と退学の罰からみる日本近代学校秩序の創出と維持	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育学研究	6. 最初と最後の頁 211-222
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11555/kyoiku.88.2_211	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 今井聖	4. 巻 45
2. 論文標題 「指導死」概念は何をもたらしたのか：遺族の語りから見る社会的経験の変容	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ソシオロゴス	6. 最初と最後の頁 21-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井出大輝	4. 巻 18
2. 論文標題 学級を編制する基準としての年齢観の成立 明治前中期小学校の進級試験論から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 立教大学大学院教育学研究集録	6. 最初と最後の頁 19-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 保坂 克洋	4. 巻 19
2. 論文標題 なぜ特別支援教育を受ける子どもが増えているのか：障害児教育政策の転換点の検討を通して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東海大学課程資格教育センター論集	6. 最初と最後の頁 15-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18995/24348872.19.15	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 今井聖	4. 巻 18
2. 論文標題 「子ども」の自殺はいかに語られていたのか(1)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 立教大学大学院教育学研究収録	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 有本真紀・嶋田由美・権藤敦子	4. 巻 64
2. 論文標題 儀式唱歌《勅語奉答》の位置付け：式次第と《勅語奉答》への言及に着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 立教大学教育学科研究年報	6. 最初と最後の頁 161-182
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14992/00020791	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 嶋田由美, 有本真紀, 権藤 敦子	4. 巻 7
2. 論文標題 2種の儀式唱歌《勅語奉答》をめぐる論考 小学校唱歌教授細目から読み解く教育現場での《勅語奉答》の扱い	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 学習院大学 教育学・教育実践論叢	6. 最初と最後の頁 71-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 北澤毅	4. 巻 29
2. 論文標題 理論の応用可能性：一般化と相対化への着目	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本教師教育学会年報	6. 最初と最後の頁 44-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 間山広朗	4. 巻 48
2. 論文標題 いじめ指導における法教育の可能性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 神奈川大学 心理・教育研究論集	6. 最初と最後の頁 127-138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 今井聖	4. 巻 35
2. 論文標題 「いじめ自殺」事件における過去の再構成：大津いじめ事件の「自殺の練習」報道に着目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代の社会病理	6. 最初と最後の頁 81-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 早坂めぐみ・越川葉子	4. 巻 36
2. 論文標題 アメリカの公立小学校におけるKindergartenとFirst Gradeの教室環境の比較 マサチューセッツ州のA小学校における観察から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 秋草学園短期大学紀要	6. 最初と最後の頁 129-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 水谷智彦	4. 巻 63
2. 論文標題 生徒集団を管理する罰の諸類型 「学校管理法書」中の罰の方法とその効果の分析から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立教大学教育学科研究年報	6. 最初と最後の頁 139-152
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 今井聖	4. 巻 47
2. 論文標題 学校教育における 教授 - 学習 - 評価 に関する一考察 理論的位置づけと実践上の課題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 神奈川大学心理・教育研究論集	6. 最初と最後の頁 113-125
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 今井聖	4. 巻 17
2. 論文標題 言説的資源としての「子どもの権利」 教育の原理と「問題」における規範の用法をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立教大学大学院教育学研究集録	6. 最初と最後の頁 37-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 粕谷圭佑	4. 巻 63
2. 論文標題 ストーリーメイカーを育む国語科教育についての一試論 文学作品の「理解の深まり」研究の批判的検討をもちに	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立教大学教育学科研究年報	6. 最初と最後の頁 205-216
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 井出大輝	4. 巻 17
2. 論文標題 閉鎖的な授業空間としての教室の形成過程の分析に向けて 学校建築史研究の再構成を通して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立教大学大学院教育学研究集録	6. 最初と最後の頁 51-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩佐菜々子	4. 巻 17
2. 論文標題 「気になる子」研究への相互行為論的アプローチ 保育 / 幼児教育の「文化」への着目	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立教大学大学院教育学研究集録	6. 最初と最後の頁 15-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菅野晃平	4. 巻 17
2. 論文標題 複層化する「児童」 児童のおしゃべりと「しずかに！」から学校的社会化の更なる展開を目指して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立教大学大学院教育学研究集録	6. 最初と最後の頁 25-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 粕谷圭佑	4. 巻 105
2. 論文標題 「社会化」過程の再特定化 幼稚園年少級におけるルーティン活動の相互行為分析	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育社会学研究	6. 最初と最後の頁 115-135
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 北澤毅	4. 巻 62
2. 論文標題 「逸脱」と「社会化」をめぐる研究小史 構築主義と学校的社会化を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立教大学教育学科研究年報	6. 最初と最後の頁 9-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 有本真紀	4. 巻 62
2. 論文標題 小学校1年生の歴史社会学 明治期・大正期における「初学年」の取扱いに着目して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立教大学教育学科研究年報	6. 最初と最後の頁 35-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14992/00017612	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 間山広朗	4. 巻 45
2. 論文標題 進路指導のあり方と地域連携 「進路指導の舞台裏」から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 神奈川大学 心理・教育研究論集	6. 最初と最後の頁 305-320
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 越川葉子	4. 巻 45
2. 論文標題 子ども理解に関する思想の基礎的研究 - 現代教育における逸脱論的視座の応用可能性について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 神奈川大学 心理・教育研究論集	6. 最初と最後の頁 363-369
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鶴田真紀	4. 巻 71
2. 論文標題 The Transfer: The Change in Category from Disabled to Healthy Child and the Mother's Perception	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育学論集	6. 最初と最後の頁 227-242
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山田鋭生	4. 巻 45
2. 論文標題 一斉教授の歴史的成立過程にみる授業の協働性 - 教育史研究から読み解く「授業の方法論」 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 神奈川大学 心理・教育研究論集	6. 最初と最後の頁 225-232
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山田鋭生・小野奈生子	4. 巻 17
2. 論文標題 幼稚園教育場面にみる学校的相互行為 第二次的社会化の原初形態としての「学校的社会化」という観点から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 共栄大学研究論集	6. 最初と最後の頁 115-124
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 保坂克洋	4. 巻 45
2. 論文標題 障害児教育理念の歴史的展開に関する一考察 障害児教育に関する「報告・答申等」に着目して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 神奈川大学 心理・教育研究論集	6. 最初と最後の頁 409-420
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 今井聖	4. 巻 45
2. 論文標題 学校安全問題の拡大と「指導死」概念 2000年代の日本における学校安全施策と言説に着目して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 神奈川大学 心理・教育研究論集	6. 最初と最後の頁 103-113
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 今井聖	4. 巻 16
2. 論文標題 Structuring of Perception in Social Studies Class: An Ethnometodological Approach to Cooperative Learning in the Classroom	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立教大学大学院教育学研究収録	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 粕谷圭佑	4. 巻 45
2. 論文標題 学校安全対策としての地域連携の課題に関する基礎研究 『川西市子どもの人権オンブズパーソン』の取り組みを手がかりにして	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 神奈川大学 心理・教育研究論集	6. 最初と最後の頁 331-340
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 粕谷圭佑	4. 巻 62
2. 論文標題 子どもの『うそ』と『演技』再考 自己の振る舞いを「演出」する技法の可能性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立教大学教育学科研究年報	6. 最初と最後の頁 207-217
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岩佐菜々子	4. 巻 16
2. 論文標題 園児である ことの実践 「お姉ちゃん」カテゴリーに着目して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立教大学大学院教育学研究収録	6. 最初と最後の頁 17-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 有本真紀	4. 巻 882
2. 論文標題 音楽文化から見る日本近代	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『明治150年を問いたず』2018地理歴史教育 7月増刊号	6. 最初と最後の頁 120-125
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 間山広朗・中村瑛仁・伊藤秀樹・小野奈生子・紅林伸幸	4. 巻 103
2. 論文標題 教育フィールドワーク研究の到達点 理論・調査法・研究知見の観点から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 教育社会学研究	6. 最初と最後の頁 111-143
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鶴田真紀	4. 巻 24
2. 論文標題 「発達障害のある子ども」における「子どもらしさ」の語られ方 「逸脱」を構成する概念装置	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 子ども社会研究	6. 最初と最後の頁 77-91
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計34件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 間山広朗
2. 発表標題 大津市事件以降のいじめ問題を考えるために - この10年を俯瞰して -
3. 学会等名 日本教育社会学会 第74回大会（オンライン開催）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 今井聖
2. 発表標題 いじめをめぐる事実認定の今日的様相 第三者委員会に着目して
3. 学会等名 日本教育社会学会 第74回大会（オンライン開催）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 稲葉浩一
2. 発表標題 いじめ認定言説の展開 旭川市中学生凍死事件をもとに
3. 学会等名 日本教育社会学会 第74回大会（オンライン開催）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山田鋭生・小野奈生子・高嶋江
2. 発表標題 初任者教員の授業実践をめぐるアクションリサーチの可能性 形式構造の記述とフィードバック場面の分析から
3. 学会等名 日本教育社会学会 第74回大会（オンライン開催）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 渡辺哲男・石本啓一郎・粕谷圭佑
2. 発表標題 ラウンドテーブル 国語学習のリアルを問う 教育心理学・教育社会学との対話から
3. 学会等名 第142回全国大学国語教育学会（オンライン開催）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 粕谷圭佑
2. 発表標題 集団活動の教示としての「注意」：幼稚園年少級初期場面の保育者-園児間の相互行為分析
3. 学会等名 日本子ども社会学会 第28回大会（オンライン開催）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 粕谷圭佑
2. 発表標題 オンライン子育て支援の相互作用(3) 「わが子の報告」の組織化と機能
3. 学会等名 日本社会学会第95回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 井出大輝
2. 発表標題 特別な配慮が必要とされる児童に関する原因・対処法論の社会-歴史的特徴 明治後期の『劣等児』に関する記述から
3. 学会等名 日本教育社会学会 第73回大会（オンライン開催）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 粕谷圭佑・井筒優菜・岸上直樹
2. 発表標題 社会問題としての 教師の多忙化 新聞言説と教師の語りに着目して
3. 学会等名 日本教育社会学会 第73回大会（オンライン開催）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 粕谷圭佑
2. 発表標題 保育者と園児の間合い：教示の協働的達成はいかに成し遂げられるか
3. 学会等名 日本認知科学会 「間合い」研究分科会 第19回研究会（オンライン開催）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 平井大輝
2. 発表標題 学級の秩序化実践と周縁的存在としての教師
3. 学会等名 日本教育社会学会 第72回大会（オンライン開催）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 間山広朗
2. 発表標題 いじめ指導における法教育の可能性 『こども六法』に刺激を受けて
3. 学会等名 日本教育社会学会 第72回大会（オンライン開催）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 粕谷圭佑
2. 発表標題 個人作業を導く一斉指導の構成 幼稚園年少級における製作場面に着目して
3. 学会等名 日本教育社会学会 第72回大会（オンライン開催）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 井出大輝
2. 発表標題 人物評価論の変化に伴う児童観の変容 明治期操行査定論の分析を通して
3. 学会等名 日本教育社会学会 第72回大会（オンライン開催）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 稲葉浩一・山田鋭生・高嶋江
2. 発表標題 教師は教師に何を伝えるのか：問題経験の語りにもみる「協働」の分析
3. 学会等名 日本教育社会学会 第72回大会（オンライン開催）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 有本真紀
2. 発表標題 調査対象としての尋常小学1年生 明治期・大正期の教育書・教育雑誌から
3. 学会等名 日本教育学会第79回大会（オンライン開催）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 有本真紀・嶋田由美・権藤敦子
2. 発表標題 儀式唱歌にみる《勅語奉答》の位置付け 儀式唱歌が作った子どもの心と身体()
3. 学会等名 日本音楽教育学会第51回大会(オンライン開催)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 嶋田由美・有本真紀・権藤敦子
2. 発表標題 戦前の子どもが語る《勅語奉答》《海ゆかば》の記憶 儀式唱歌が作った子どもの心と身体()
3. 学会等名 日本音楽教育学会 第50回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 越川葉子
2. 発表標題 発達障害児支援制度と「発達障害であること」の相互関係
3. 学会等名 日本教育社会学会 第71回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 越川葉子
2. 発表標題 「いじめ問題」と学校の対応 教師の語りにもみる学校現場のリアリティー
3. 学会等名 日本学校心理士会 2019年度大会 研修講座(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yasuyuki Takahashi
2. 発表標題 Challenging Child Issues in Japan
3. 学会等名 The 2nd International Seminar on Family and Consumer Issues in Asia Pacific (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yasuyuki Takahashi
2. 発表標題 Current Status and Issues of Early Childhood Education and Care Systems in Japan
3. 学会等名 International Symposium: Current Problems and Strategies for Supporting the Healthy Development of All Children (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 保坂克洋
2. 発表標題 発達障害児支援における包摂実践の検討 放課後児童クラブでの相互行為に着目して
3. 学会等名 日本教育社会学会 第71回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 今井聖
2. 発表標題 学校問題としての子どもの自殺 2000年代以降の「学校の管理下」における自殺事件を中心に
3. 学会等名 日本教育社会学会 第71回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 粕谷圭佑
2. 発表標題 幼稚園年少級における教示場面の構成
3. 学会等名 日本教育社会学会 第71回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 粕谷圭佑
2. 発表標題 「子どもの相互行為能力」研究の現在と課題
3. 学会等名 日本子ども社会学会 第26回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡辺哲男・石本啓一郎・粕谷圭佑
2. 発表標題 ラウンドテーブル 国語科教育と基礎教育学の対話の試み 教育心理学・教育社会学の若手研究者を迎えて
3. 学会等名 第136回全国大学国語教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 嶋田由美・有本真紀・権藤敦子
2. 発表標題 儀式規程・儀式唱歌の制定と「正しく歌う」歌唱指導 儀式唱歌が作った子どもの心と身体(1)
3. 学会等名 日本音楽教育学会 第49回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 水谷智彦
2. 発表標題 訓練の記述からみる教師の児童観 大正期愛媛県内小学校「人別表」に着目して
3. 学会等名 日本教育社会学会 第70回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小野奈生子・山田鋭生・粕谷圭佑
2. 発表標題 学校的社会化の諸相(6) 幼稚園における「規則」と「一斉授業」に着目して
3. 学会等名 日本教育社会学会 第70回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 保坂克洋
2. 発表標題 発達障害児支援における支援者のリアリティ 支援員の葛藤状況に着目して
3. 学会等名 日本教育社会学会 第70回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 今井聖
2. 発表標題 「協同学習」場面における教師の発話管理と児童の学び
3. 学会等名 日本教育社会学会 第70回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 今井聖
2. 発表標題 Cooperative Learning in the Classroom: A Comparative Analysis of Two Social Studies Classes
3. 学会等名 11th Australasian Institute of Ethnomethodology and Conversation Analysis Conference
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高嶋江
2. 発表標題 同僚教員との相談実践 - 語りの中のカテゴリー化に着目して -
3. 学会等名 日本教師教育学会 第28回大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計11件

1. 著者名 片山悠樹・寺町晋哉・粕谷圭佑	4. 発行年 2023年
2. 出版社 大月書店	5. 総ページ数 192
3. 書名 現場から変える！教師の働き方（粕谷圭佑，第1章「時間と「ゆとり」をめぐる「多忙」のレトリック」，片山悠樹・粕谷圭佑，5章「働き方改善に取り組む学校」）（20-36頁，104-146頁）	

1. 著者名 下司晶・間山広朗	4. 発行年 2023年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 248
3. 書名 道徳教育（間山広朗，第5章-2「教育社会学からみたいじめ・問題行動」）（100-113頁）	

1. 著者名 呉永鎬・坪田光平・保坂克洋	4. 発行年 2022年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 336
3. 書名 マイノリティ支援の葛藤（保坂克洋，コラム4「制度の交差点に立たされるとき 発達障害児に関わる学童保育指導員の語りから」）(197-203頁)	

1. 著者名 北澤 毅・間山 広朗編著（執筆者：北澤毅、越川葉子、間山広朗、稲葉浩一、今井聖、山田鋭生）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 334
3. 書名 囚われのいじめ問題 - 未完の大津市中学生自殺事件 -	

1. 著者名 元森 絵里子・高橋 靖幸・土屋 敦・貞包 英之	4. 発行年 2021年
2. 出版社 青弓社	5. 総ページ数 232
3. 書名 多様な子どもの近代（高橋靖幸，第2章「貰い子たちのゆくえ：昭和戦前期の児童虐待問題にみる子どもの保護の接合と分散」）(85-128頁)	

1. 著者名 元森絵里子・吉岡一志・南出和余・高橋靖幸・大嶋尚史・坪井瞳・藤間公太・針塚瑞樹・土屋敦・野辺陽子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 208
3. 書名 子どもへの視角：新しい子ども社会研究（第3章，高橋靖幸「子ども研究における「構築」とは何か：児童虐待問題の歴史」）（pp.67-84）	

1. 著者名 神代健彦、越川葉子、小谷英生、藤谷秀、和田悠、小野祥子、有本真紀	4. 発行年 2019年
2. 出版社 はるか書房	5. 総ページ数 272
3. 書名 悩めるあなたの道徳教育読本（「いじめ問題から見る道徳教育の盲点」（越川葉子）「音楽教育の成り立ちと道徳」（有本真紀））	

1. 著者名 日本音楽教育学会編（執筆：有本真紀、今川恭子、小川容子、加藤富美子、権藤敦子、齊藤忠彦、菅裕、本多佐保美、ほか）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 音楽之友社	5. 総ページ数 248
3. 書名 音楽教育研究ハンドブック（「社会集団と音楽教育」（有本真紀））	

1. 著者名 大桃伸一、小川崇、小川澄江、請川滋大、杉浦英樹、山口宗兼、村上智子、金山美和子、木村吉彦、高橋靖幸、石井美和	4. 発行年 2019年
2. 出版社 学術図書出版社	5. 総ページ数 254
3. 書名 未来を拓く保育の創造（「11章 保育の制度」（高橋靖幸））	

1. 著者名 北澤毅・間山広朗編（執筆：北澤毅、小野奈生子、鶴田真紀、高橋靖幸、山田鋭生、間山広朗、稲葉浩一）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 北樹出版	5. 総ページ数 184
3. 書名 教師のメソドロジー 社会学的に教育実践を創るために	

1. 著者名 鶴田真紀	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ハーベスト社	5. 総ページ数 190
3. 書名 発達障害の教育社会学 教育実践の相互行為研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	有本 真紀 (Arimoto Maki) (10251597)	立教大学・文学部・教授 (32686)	
研究分担者	間山 広朗 (Mayama Hiroo) (50386489)	神奈川大学・人間科学部・教授 (32702)	
研究分担者	鶴田 真紀 (Tsuruta Maki) (60554269)	創価大学・教育学部・准教授 (32690)	
研究分担者	小野 奈生子 (Ono Naoko) (90615973)	共栄大学・教育学部・教授 (32420)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------